

コミティア 101

お試し用



スペース・つ28a
サークル名・人生は緑色

もっていくもの一覧

新刊

口迷い仔猫の居候（ひとでなしの二人組1）

A5（2段組み）/84P/オンデマンド/600円

空から幽霊少女が降って来た！

現代オカルトファンタジー。web連載をまとめたものです。

既刊

・調律師

A5（2段組み）/252P/オンデマンド/1000円

現代オカルトファンタジー [調律師](#) サイト掲載分+後日談。

[Amazonでも取扱あります（委託分は1,500円です）](#)

・かふえ・えくすぶれす

A7/52P+α/コピー/100円

[喫茶店の話](#) に+αしてまとめたもの。

JR某駅改札ですぐ右側にある関東チェーンの喫茶店かふえ・えくすぶれすを舞台にした連作短編集。

コピー本ならではの、お遊び一杯の本にした、つもり

・呪詛裁判所にようこそ！

B6/コピー/100円

ジュソサイバンショって変換すると「呪詛裁判所」になるよね？（正しくは、受訴裁判所）

ということから発展した傍聴×ゴーストバスターもの。

高校生の一海さん二人と小学生沙耶の話。

・この点に関する原審の判断は結論において正当である

B6/27頁/コピー /100円

リーガルラブ（と呼びたい）法律小ネタでの恋愛掌編。

[九官鳥](#)メンバー+α。連作短編集風。

大体いつも九官鳥でやってるノリの話です

収録作：[この点に関する原審の判断は結論において正当である](#)

原因において自由な行為／背信的悪意者／承継取得／原始取得

宣誓／明認方法／債務不履行

**電子書籍版もあります→[☆](#)

[Amazonでの取扱あります→委託分は200円](#)

→法律童話

B7/コピー—/100円—

童話の法律パロ。ツイノベとSS。赤ずきんや白雪姫など。

完売しました。[パプーの方で電子書籍販売中。](#)

→恋愛色—（残部極少）—

A6/47頁/コピー—/100円—

[\[約30の嘘\]](#)からお借りしたお題で、色と恋愛の掌編集。

話のテーマカラー—の紙をそれぞれ使用

収録作：しばし完熟を待て（緑）／泥にまみれたアンクレット（茶色）／空が泣くなら（青）—

——トワレの小瓶（桃）／舞い上がる粉砂糖（白）／カスタードマスタード（黄）—

完売しました。[パプーで電子書籍販売中](#)



『ちょっとあんた！ その茶髪にギンガムチェックのシャツきた、むっつりしたそのあんた！ あんた、あたしのこと見えてるんでしょう？ うら若き乙女がビルから飛び降りてきたっていうのに無視するなんて一体どういう了見よっ！ ひとでなし！』

神山隆二の前に降って来たのは、自称記憶喪失の幽霊少女だった。

なし崩し的に隆二のもとで居候を始める幽霊少女、マオ。

一人で怠惰な生活を送っていた隆二には、マオがいる生活もそれなりに刺激的で楽しいものだった。

そんなある日、少女が現れる。

「ソレを渡してください」
マオが抱える秘密とは！？

おまけ



おまけの葉

女は、足下を見下ろした。
人が豆粒のような小ささで歩いているのが見える。
スカートの裾が、風でふわりと揺れる。
一つ息を吸う。
そして女は、ビルの屋上から飛び降りた。

それは三日間続いた雨が止み、憎らしいくらい快晴の日だった。
神山隆二は、切れた珈琲と煙草を買いに普段蟄居している自宅からしぶしぶ出てきた。
日差しがまぶしい。
ほどほどに人通りのある道をだらだらと歩く。家から一番近いコンビニが徒歩十分というのはやっぱりよくない。家から二分のところにあったコンビニは昨年末閉店した。たかだか珈琲と煙草を買うのに五倍も歩くなんて非生産的だ。

などと墮落しまくったことを思いながら、のぼしっぱなしの茶色い髪を右手でかきあげる。
ジーンズのポケットに両手を突っ込んでだらだらと歩く。

『やー』

上から何かかけ声のようなものが聞こえた気がして、上を見る。
ぎよっとする、とはこのことだ。
ビルの上から女が一人ふってきた。
え、何自殺？
思わず立ち止まる。急に立ち止まった隆二の背中に真後ろを歩いていたサラリーマンがぶつかった。スーツ姿の彼はちっと舌打ちする。

すみません、ともごもごと呟いて頭を下げる。

その間に、女は隆二の鼻先を通り過ぎて地面に落下した。

アスファルトに頭をのめり込ませて、足だけが二本飛び出ている。なんかで見た事ある光景にしばし考え、

「すげきよかよ」

有名な小説の一場面を思い出し、口の中で言葉を転がすようにしてつつこむと、その足を通り抜けてコンビニを目指した。

こうも暑いと変な輩が増えるな。

『って、ちょっとまったー！』

後ろから声が聞こえる。女の声にしては高すぎず、耳に心地いい程度の高さで、隆二は少し感心する。声量はともかく。

『ちょっとあんた！ その茶髪にギンガムチェックのシャツきた、むっつりしたそのあんた！ あんた、あたしのこと見えてるんでしょう？ うら若き乙女がビルから飛び降りてきたって

いうのに無視するなんて一体どういう了見よっ！ ひとでなし！』

ギャギャー騒ぎつつ、近づいてくる。

『聞いてるんでしょ！ 逃がしはしないわよっ！』

女は隆二の前に両手を広げて立ちふさがる。しかし、それは丁度コンビニの前。隆二は女の鼻先で曲がり、すっと店内に入った。

入ってすぐの角を曲がる。窓際、雑誌のラックの前を通り過ぎる。週刊誌には毒々しい字で「怪奇！ ミイラの謎！」という文字が踊っていた。

いつも飲んでるインスタントコーヒーを手に取り、レジにむかい、

「マルボロ」

すっかり顔なじみになった店員にそう声をかける。店員はいつも通り三箱用意してくれた。

『ちょっとちょっとちょっとと！ 何無視してくれちゃってんのよ！』

慌てて店内に入ってきた女が耳元でぎゃーぎゃー騒ぐ。

相変わらず愛想のない店員に代金を支払う。

もっと愛想のいい可愛い女の子もいるのに。なんでこいつはこんなに愛想がないんだか、同じ店なのに。

黙ったまま金銭の授受が行われる。

『ちょっと、聞いてるの！？ 聞いてるでしょう！？ なんとかいいなさいよ！ あ、だからって「なんとか」ってだけいう、そんなお約束な展開は許さないんだからね！ 無視しないでよー！』

乱暴にビニールに入れられたコーヒーと煙草を持ち、コンビニを後にする。ついでに入り口のところにあったバイト情報誌をとると、袋の中に押し込んだ。そろそろなにか仕事を探さないと

。

『あんた、あたしのことをなんだと思ってるのよ？ 馬鹿にしてるの！？』

ぎゃーぎゃー騒ぐ女を通り抜ける。

「なにしてそりゃあ」

小さく口の中だけで呟く。

「頭湧いた幽霊だろ」

あつついなー、と空を睨み、家路を急いだ。

＊＊

少女は正直、途方に暮れていた。

少女が追っている実験体の情報が、ぷつりと途絶えてしまった。

ただ、それに関係すると思われる女性は見つけた。もしかしたら偶然かもしれないけれども、多分、少女が探しているものに関係している。

それは、目撃情報の最後の場所とも一致していた。

なので、あの辺りに住んでいる知り合いに聞く事にしよう。そうすれば、何かあるだろう。

少女はそう思った。

静寂は嫌いではない。

聞こえてくるのはただ風が動く音と自分が歩く音。後は他に、聞こえてくる音がない。

そんな状態は、嫌いではない。

真夜中、道の真ん中に立って、隆二はそんなことを思う。

いつも隣にいるマオは、眠っていたのでおいてきた。

突然コーヒーが飲みたくなって、でもあいにく切らしていた。

今は便利だよなあ、コンビニなんてあって。そんな年寄りみたいなことを考えながら、コーヒーと思いつきで買ったチョコの入った袋を振り回すようにして持ちながら歩く。

かさかさと、袋の音がする。

静寂は嫌いではない。

寧ろ、心地よいとも思う。

家の鍵を出して、開ける。

『隆二っ！』

「うわっ！」

開けたと同時にマオが飛び出て来た。

『もお、どこ行ってたのよおっ！』

半分泣きそうな顔をして、マオは言った。

「コーヒーを買いに」

そうやって袋をかかげてみせると、マオは頬を膨らませた。

『起きたら一人ぼっちで寂しかったんだからあ！ 起こしてよ、誘ってよ。このカフェイン中毒！』

言いたいだけ言うと、マオは部屋の奥に引っ込んだ。

多分、ソファの上でふて寝している。うつぶせになって、こちらが声をかけても反応しない。それでも、横目だけでちらっとこちらを見てくることだろう。

すっかり慣れたマオとのやりとりを思い、少しだけ笑う。

そう、静寂は嫌いではない。

寧ろ、心地よいとも思う。

ずっと一人で居たから。長い事、一人で暮らしていたから。

昔、一緒に暮らしていた女性がいた。

体の弱い女性だった。

ずっと一緒にいたいと思っていた。

でも、自分は彼女を見捨てた。

彼女が自分より先に死んでしまうことが怖くて、彼女の元から姿を消した。

一度、様子を見に戻った。もう一度、やり直せないか、とも思っていた。

けれども、彼女は既に亡くなっていた。

あの時、誓った。

彼女のお墓の前で。もう、人とは深く関わらないと。亡くしてしまうのが、怖いから。

それなのに、と少しだけ自嘲気味に唇を歪める。

「マオー、機嫌直せー」

それなのに今、ソファの上で拗ねたマオを、居候猫を宥めている。

「マオ、ごめんな」

ちょっとだけ、マオが身じろぎした。

『起きたら一人で、寂しかったの』

半分だけ顔をあげて、こちらを見る。膨らんだ頬。

「ごめん」

もう一度謝る。

『隆二の唐変木』

「ごめんって」

『いいよ、もう。どーせ、隆二だもん』

そうって、マオは再び顔を枕に押し付けるけど。ちょっと笑っていたからこれでもう大丈夫。

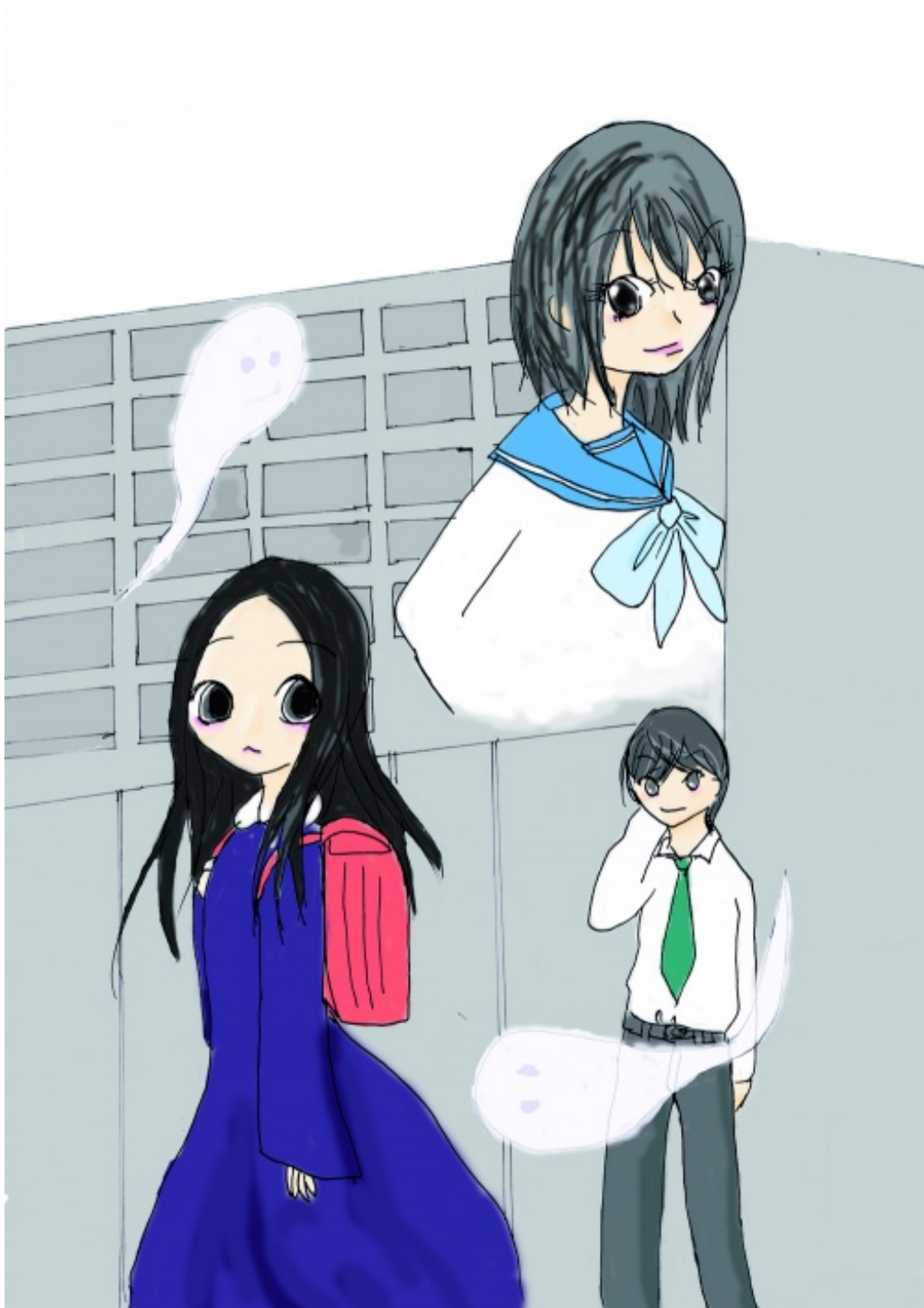
隆二は少しだけ微笑んだ。

マオは人じゃない。だから、あの時の誓いを破った事にはならない。

幽霊は自分より先に死んだりしない。

だから、大丈夫。

そんなことを思う。



受訴：訴訟を受理すること。

受訴裁判所：ある事件に関し、判決手続が将来係属すべき、あるいは現に係属する、またはかつて係属した裁判所。

呪詛：うらみに思う相手に災いが起こるように神仏に祈願すること。まじない。のろい。

広辞苑 第六版

「じゅそさいばんしょお？」

円が怪訝そうな声を上げ、その隣に座った沙耶もまた、不思議そうに首を傾げた。

「そう」

そんな二人の正面に座った直純は一つ頷くと、

「受ける訴え、と書いて受訴裁判所。受訴ってというのは、訴訟を受理する、受け付けること。で、ある事件に関し、判決手続を係属、つまり取り扱っている裁判所のこと。それが本来の法律用語」

ここまではいい？ と二人の方を見る。沙耶は眉をよせて真剣に考える顔をしていた。

「まあ、小学生には難しいよね。円は？」

「よくわかんないけど、法律の話なわけね？ で？」

とあっさりと言った。

「少しは考えるとかして欲しいんだけど、まあいいや」

呆れたように直純は笑い、

「ここからが本題。裁判に至るまでもつれた人間関係やらの怨念が、じゅそ裁判所という音にひっばられ、怪異が多発しているんだ」

オッケー？ と尋ねると、今度は沙耶が何度か小刻みに頷いた。

「円は？」

「ん？ 怨念がどうのってここまではわかったけど、音にひっばられてってどういうこと？」

「だから、本来の受訴と、呪いの方の呪詛って音が同じだろ？ ケータイの変換も呪詛裁判所になるし」

当たり前のように言う直純に、

「だあかあらあー」

苛立ったように円は机を爪でたたき、

「呪詛ってなによ」

円が言った瞬間、直純は心底呆れたようにため息をつき、沙耶も沙耶で驚いたように隣に座る円を見上げた。

「え、なに？」

二人の反応に驚いたような声をあげる円。

「あのさ」

額に手を当てて、わざとらしくため息をついてみせながら直純は、

「仮にも、一応、とりあえず、一海の次期宗主なんだからさ。基本的な用語ぐらい覚えておこうよ」

「うるさいわねー」

円は不満そうに唇を尖らせ、

「知識はあんたの担当、実践は私の担当って決めたでしょう？」

「だからって物には限度ってものがさ。まあいいけど。どうせ言っても無駄だろうし」

「無駄ってなによ」

「沙耶、わかる？」

二人のやりとりを黙って見ていた沙耶は、突然水を向けられ少し慌てたように背筋を伸ばすと

「えっと。恨んでる相手に、悪い事が起きるように呪いをかけること。おまじないみたいに。丑の刻参り？ とかそういうの……」

それから何うように直純の顔を見上げた。直純は優しく微笑むと、

「正解」

手を伸ばし、沙耶の頭を撫でた。円も最初微笑ましそうにそれを見ていたが、

「まったく、それに比べて円は」

再び小言を言われそうになると、慌てて、

「で。その話つまり、仕事の話でしょう？」

真面目な顔を作って、身を乗り出して見せた。

「ああ」

直純は一度頷く。

「宗主が、その怪異について俺と円と、もし可能ならば実地研修も兼ねて沙耶で調べてこい、と」

直純の言葉に円は不敵に笑って頷き、

「え、え、あたしも？」

沙耶はおろおろと二人を見比べた。

「大丈夫よー、父様が沙耶もって言うならそんな強いなにかがいるわけじゃないんだろうし、ちゃんと修行もしてるんでしょ？ そろそろ実地は妥当じゃない？」

「うん、沙耶がちゃんと修行してるのはわかってるし。俺も円も一緒に行くんだし。ね？」

そっくりな切れ長の目を優しく細めて笑う二人に、沙耶はゆっくり頷いた。

「本当に、大丈夫。さっきの呪詛の話、完璧だったし。誰かさんと違って」

嫌みっぽく言われた言葉に、もう終わった話だとのんびりお茶を飲んでいて円はそれを吹きそうになった。

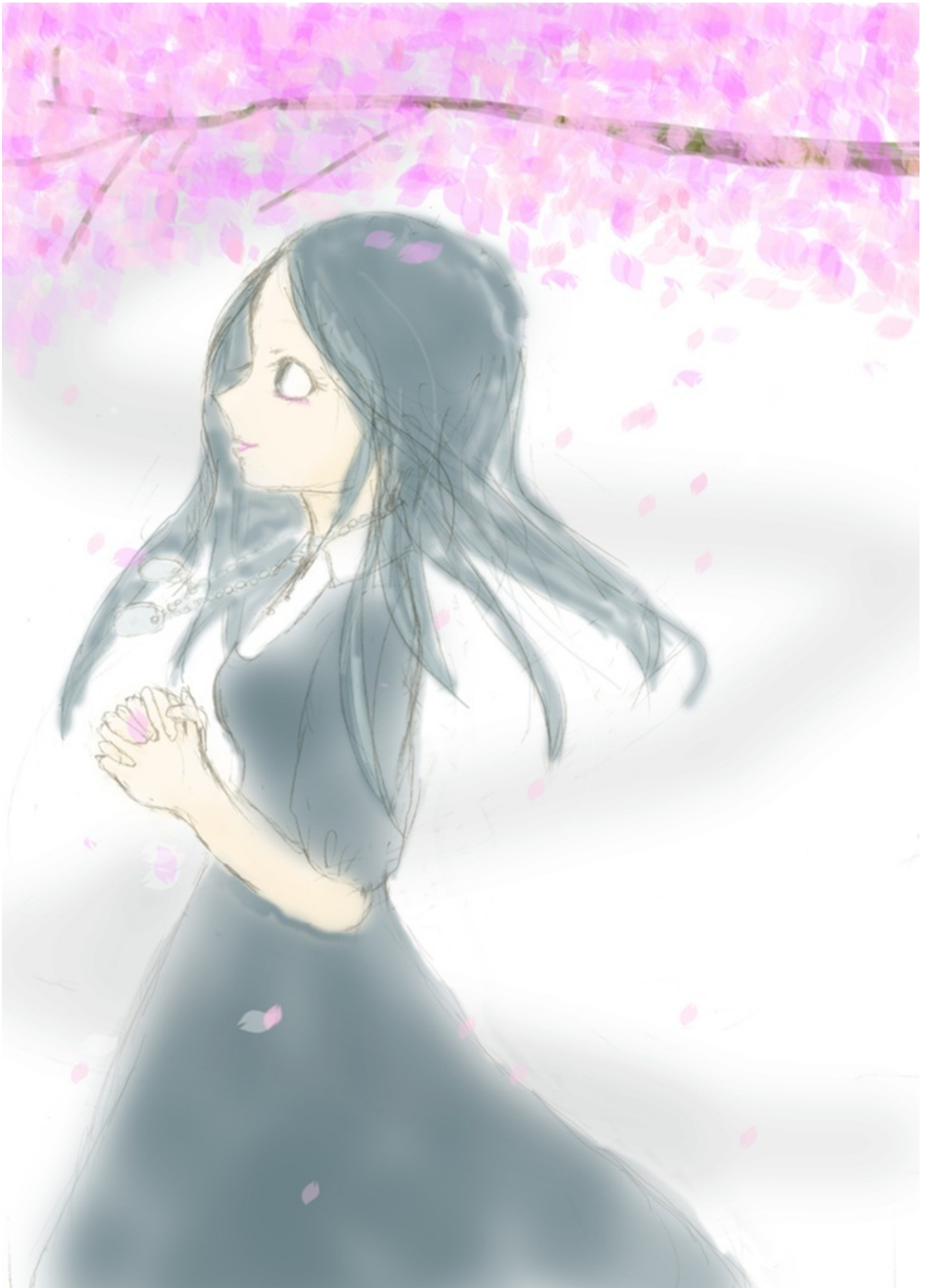
「やだっ、直しつこい。小姑！」

「しつこいじゃないだろ。露骨に話そらしといて。円の考えてることなんて、お見通しなんだから。産まれたときからのつきあいなんだし。大体、円はね」

ねちねちと説教を始める直純と、うるさそうにそれを聞き流す円。ふたりのやりとりを見ながら、沙耶はすこっしだけ、楽しそうに微笑んだ。



ルールを守って楽しく (?) 傍聴しましょう。



例えば、ピアノのように環境を調律する。

人と人ならざるものの間を調律する「調律師」。

こっくりさんに憑かれた高校生・龍一は、助けてくれた調律師の女性・沙耶に一目惚れをする。けれども、沙耶には生まれつき「黒龍」が憑いていて、それを鎮めるためには彼女の記憶が代償となる。

黒龍の存在から沙耶に距離を置かれたり、年齢差で気持ちがすれ違ったりでなかなか上手くいかない恋愛模様。

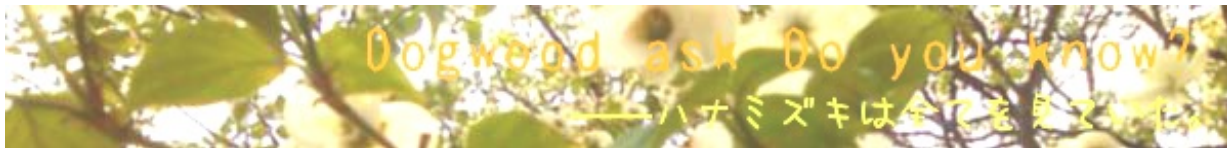
さらには、沙耶の同業者で龍一のクラスメイト・翔には「何も知らない癖に」と足手まとい宣言をされたり、クラスメイトで龍一に片思いの暴走恋愛娘・杏子があらわれたり、沙耶の元カレがあらわれたり……。

現代オカルト恋愛ファンタジー。

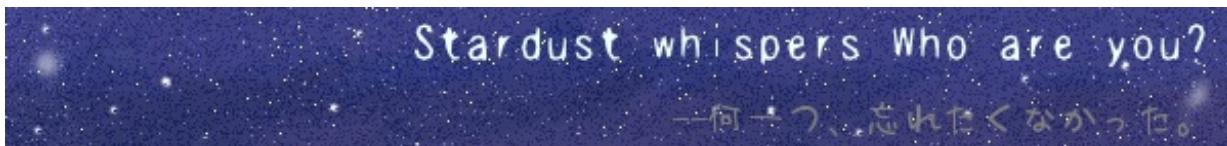
* サイト掲載分に後日談を加えたものとなっています。



- 第一章 ボーイ・ミーツ・ウーマン
- 第二章 ありがとうございます、と依頼人は言った
- 第三章 夢魔は悪夢をみるか？
- 第四章 オドラデクの猫
- 第五章 櫻の樹の下には
- 第六章 本当の空
- 第七章 ウーマン・ミーツ・ボーイ



- 第一章 恋も病熱
- 第二章 一海家の一族
- 第三章 宗教風の恋
- 第四章 もう人間じゃない？
- 第五章 ぶざまな彼ら
- 第六章 不屈の想起装置



- 第一章 不可解な夢に就て
- 第二章 いやなんです
- 第三章 龍と一人の女
- 第四章 有声慟哭
- 第五章 あなたをつくります
- 第六章 それぞれの冴えたやり方
- 第七章 追憶あげます



- 第一章 小さな町
- 第二章 かつての恋人へのささやかな贈り物

第三章 永訣の夜

第四章 あたしはあたしで一人でいきます

第五章 両親もどき

第六章 恋をしにいく

第七章 傍観者はかく語りき

第八章 僕はおもてで呼んでいる

第九章 Woman meets Man

+ 後日談「拝啓 花嫁様」

「こっくりさん、こっくりさん、鳥居を潜ってお越してください」

グループの一人の今のマイブームがオカルトで、試してみることになった。ただそれだけのこと。

こつこつ。

廊下を歩いていた男子生徒は、二―四とプレートがある教室の前で足を止めた。課題があるというのにノートを忘れた自分のうかつさを悔やみ、半ば呪いながら、いつも通り扉を開けてばっ！

八つの瞳がいっせいに彼に向けられた。

「えっと？ ごめん、もしかして、……入っちゃダメだった？」

扉を開けた男子生徒は困惑を顔に浮かべ、ドアをあけた体勢のまま、女子四人をみる。

「榊原君……。……そういうわけではないけど」

一人の子がそう言って、やはり困ったように笑おうとして、

「え？」

男子生徒から視線を手元の十円玉に移す。

「うごいて、る？」

かたかた、と音を立てて十円玉が揺れている。

押さえていた人差し指に軽い圧力を感じて、彼女は思わず手を離した。同じようにして、他の三人も手を離し、怖いものを見るかのように十円玉を見つめる。

ゆっくりと、それは宙に浮かび始めた。

「もしもーし」

廊下のほうからでは、窓際にいる彼女達の様子がよく見えないのか、男子生徒は幾分砕けた調子で声をかける。

「忘れ物とりに来ただけだから、すぐ帰るから」

そう言って、一步教室に足を踏み入れたとき、その十円玉は狙いたがわず彼にめがけて飛んでいった。

「榊原君っ！」

「っ！」

事態が理解できないながらも、反射的に彼は両腕を顔の前で庇うように組み、そして……、

＊＊

ぱたん、と音がしてドアが閉まっても龍一はしばらくそれを見ていた。

——どういたしまして。

笑っていた。

確かにあのとき、あの女性は笑っていた。

最初からずっと無表情だったあの女性が笑った。

「……やっぱり、笑ったほうがいいじゃないか」

自分の顔に血が集まった気がする。脈拍もなんだか速い気がする。

——どういたしまして。

そう言って笑った女性の顔を思い出して、龍一は額に手をあてて、熱を逃がすように軽く息を吐いた。

もらった名刺をきちんとしまうと、もう一度閉まったドアを見つめた。

でも、彼女の手でドアが開けられることはもうなかった。

＊＊

『しかし、あれだな。今年は三組は当たり年だな』

うろうろしながらちいちゃんは呟く。

「？」

『龍一だけじゃなくて、あいつも三組にいるんだもん。こりゃもう、居座るしかないな！』

ちいちゃんは朗らかに言い切る。

「あいつ？」

小さく呟くが、一人で騒いでいる幽霊の耳には届かない。この場で問い詰めるわけにも行かず、とりあえず龍一は三組のドアを開けた。黒板にはってある座席表から自分の出席番号を見つけると席に着く。友人たちは誰も来ていないようなのでやれやれとため息をついた。

『お、きたぞ』

ちいちゃんの呟きに一瞬眉をひそめる。

机を一つ挟んだ斜め前に座っていた男子生徒が、ゆっくりと立ち上がると、龍一の前に立つ。

「君が榊原龍一君だね？」

「？ まあ、一応」

誰だよお前。のどまででかかった台詞を飲み込むと、

『こいつはあれだよ！ 巽翔、沙耶のねーちゃんと同業者だ』

ご丁寧に頭上でちいちゃんが解説してくれた。ああ、そういえば同じ学年に寺だか神社だかの息子とかいうなんかむっつりしたやつがいたかもなあとか思う。

翔はじっと龍一を見下ろしていたがふん、とひとつ鼻で笑った。

「円さんが大絶賛していたからどんな人間かと思ったが、存外つまらない人間だな」

「巽は面白い人間だな」

頬杖をついたまま龍一は言葉を返す。今の一瞬で巽翔を敵と彼は認識した。そう、例えば一海

直純と同じような嫌なタイプ。

「初対面の人間をつまらないとか評価するなんてそうそうできることじゃないよ」

苦手なタイプにはさらりと嫌味をいってしまうのが自分のいいところでもあり、悪いところでもあると龍一は思っていた。でも今は正解。攻撃は最大の防御なり。

思わぬカウンターを喰らって翔はぴくりと眉根を上げる。ちいちゃんがにやにや笑いながらそれを見ていた。

「まあなんでもいいが忠告しておく。金輪際あの事務所には出入りするな」

「なんでお前にそんなこと」

「彼女と君はつりあわない」

さらりと吐き捨てられた。自覚していることだけに、重かった。

「君じゃ彼女の足手まといになるだけだろう？ 君は何にも知らないくせに、彼女の隣にたてるだけでも思っているのか？」

優越感に満ちた顔。足手まとい、そんなこと、自分が一番知っている。だけれども、だけど、それでも、

「おれ、は」

顔をあげて口を開きかけたそのとき

「こずちゃーん！！」

ばあんとドアを開けて、スカートを翻して、立っている翔を突き飛ばして、台風のようなが入ってきた。龍一の2つほど斜めに前に座る女子生徒に抱きつく。

「またおんなじクラスだね！ キョウちゃんうれしい！！」

「キョウちゃん？」

体制を立て直している翔に敵ながらわずかな同情心を向けると、自分の辞書にはない単語に龍一は唇をゆがめた。そんな、高校生にもなって自分を名前で呼ぶなよ。

「杏子」

“キョウちゃん”を振りほどいて、抱きつかれた女子生徒はため息をつく。

「巽に謝りな」

「え、あ、ごめん」

「杏子！」

校則違反の明るすぎる髪のをびよこんとさげて軽く謝る“キョウちゃん”に、抱きつかれたショートカットの女子生徒は一つため息をつく、翔の方を向いた。

「悪い、巽」

「うん、慣れてる」

＊＊

「……沙耶？」

ためらいがちに声をかける。

布団の上で上半身を起こした沙耶は、小さく首を傾げた。長い髪が揺れる。

「……だれ？」

かすかに、かすかに聞こえる程度の声。それでも、その場を凍り付かせるには十分だった。

「ちょっと沙耶何をいって！」

慌てたのは龍一よりも円だった。その声に沙耶の肩がおびえたようにぴくりと震える。

「円さん」

呼ばれて振り返る。龍一はゆっくりと首をふった。

「円さん、いいんです」

龍一は小さく微笑むと、

「榊原龍一、です」

小さく名乗った。それから、

「それじゃあ、俺、学校あるんで帰ります」

早口に言い切ると逃げるようにして部屋を出る。

「あ、ちょっと龍一君！」

円が慌てて立ち上がり、

「沙耶？」

その隣を転げるようにして走りながら沙耶が通り抜けた。

「待って」

廊下にでたところで、沙耶が叫ぶようにして呼び止める。龍一は立ち止まって、それでも振り返らなかった。

「あたし、あたし、ちゃんと思い出すから。忘れてないから、だから。また、来て……？」

最後の方はかすれ声で呟かれた言葉に龍一はゆっくり振り返る。そうして、ゆっくりと強引に唇の端をあげてみせた。

「言われなくても」

それだけ口にするると再び歩き出す。

すとん、と沙耶は、力が抜けたように廊下に座り込んだ。

＊＊

「おまたせー」

龍一の言葉を、声が遮った。沙耶の目が見開かれる。

嫌な予感。ゆっくりと振り返る。

見たことのある男性が、片手を振る。

「賢……」

「あれ、お取り込み中？」

「え、ええ」

「じゃあ、ちょっと待ってるねー」

男性は微笑み、少し離れた柱にもたれかかる。

「ごめんなさい、龍一君」

微笑む。

龍一君、の呼び方が癪に障る。

「堂本賢治、本物の？」

「……ええ」

小さく頷く。

もう一度ちらりと視線を後ろに向ける。

春に見た化け物を同じような柔らかそうな茶色い髪。明るい笑顔。でも、あの化け物はもっと幼く、そして自分と同じ学生服を着ていた。

あそこでケータイを片手に柱に寄りかかっているのは、もっと大人びた、スーツ姿の男性だ。

「あの、それで聞きたいこと、って？」

おずおずと沙耶が尋ねる。

「いい。大体解決した」

自分の声色が酷く冷たいものを感じられた。でも、言葉が止まらない。

「え？」

「雅が言ってた。見かけたって、二人がいるのを。より戻したの？」

「そんなんじゃ……。たまたま昨日、会って。声、かけられて」

「たまたま昨日？」

「本当に」

「たまたま昨日、声かけられてわかったんだ。堂本賢治だって」

皮肉っぽく口元が歪む。

「俺の事は覚えてなかったのに、あの人のことは覚えてるんだ」

言った瞬間、自分で自分の顔が強張るのが分かった。今、取り返しのつかないことを言った気がする。

沙耶に目があわせられない。

「それは……、ごめんなさい」

小さく囁く様な声。

「……ごめん」

床を見つめ、呟く。

「あの、龍一君……」

その呼び方に、居たたまれなくて、逃げ出した。反射的に振り返り、来た道に戻る。堂本賢治の横をすり抜けて、再び改札の中へ滑り込む。

沙耶は追いかけて来ない。声すらも。

最低だ。

言ってはいけないことなのに。

でも、覚えていたんだ。

俺のことは忘れていたのに。堂本賢治のことは。

ホームにいた電車で、行く先も確認せず飛び乗る。

駆け込み乗車を注意するアナウンスを聞きながら、立ってられなくてそのまま床に座り込んだ。膝に顔を埋める。

あのスーツ姿の大人の男性に、高校生の自分が勝てる訳がない。彼女に忘れられた自分が勝てる訳がない。彼女はなにも悪くないのに、傷つけた自分が勝てる訳がない。

周りの視線を痛い程感じながら、それでも立てなかった。

泣いている顔をあげることは出来なかった。

Cherry blossoms say "Hello"

その桜は、あたしみたいだと思った。

周りの桜が咲き出して、揃って咲いてしまったその桜は、まるであたしみたいだった。
桜の幹字を細くきくと呟いた。

「貴方は誰よ。まだ、春を待っていていいのよ。」

ねえ、もう一度、おやすみなさい。」

ゆっくりと、桜は眠がくるのを待つために、休養する桜を思ながら、思え。

その桜はまるであたしみたいだけれども、

——わたしは桜と違って何故も花を咲かせることは無い。

第一章 ボーイ・ミーフ・ウーマン

夕暮れ時の教室。女子高生四人が机を囲んで座り、小声で声を揃え、囁える。

「こつくりさん、こつくりさん、急用を呼んでお帰ください」
グループの一人の今のマイフームがオカルトで、試してみる事になった。ただそれだけの事。

こつこつ。

廊下を歩いてきた男子生徒は、二丁四とアレートがある教室の前で足を止めた。視線があるというのにノットをおれた自分のうかつさを悔やみ、手は強いながら、いつも通り扉を開けて

「ばっ！」

八つの扉がいつせいに彼に叩かれた。

「えつと？ ごめん、もしかして……人っちやタダだった？」
扉を開けた男子生徒は困惑を顔に浮かべ、ドアを開けた体勢のまま、女子四人を見る。

「御座者……そういうわけではないけど」
一人の子がさういつて、やはり固つたように笑おうとして、

「えつ」
男子生徒から視線を手元の十円玉に移す。
「うっして、うっ」
かたかた、と息を立てて十円玉が動いている。
押さえていた人差し指に汗が滲み出て、彼女は思わず手を離した。同じようにして、他の三人も手を離し、怖いものを見るかのように十円玉を見つめる。

ゆつくりと、それは田に浮かび始めた。

「もしもし」
廊下のはうからでは、壁際にいる彼女達の様子がよく見えないのか、男子生徒は幾分待けた調子で声をかける。

「忘れ物とりに来ただけだから、すぐ帰るから」
さういつて、一歩教室に足を踏み入れたとき、その十円玉は細いながわす彼にめがけて飛んでいった。

「御座者っ！」

「っ！」
事態が理解できないながらも、反動的に彼は同様に廊下で返すように返す。

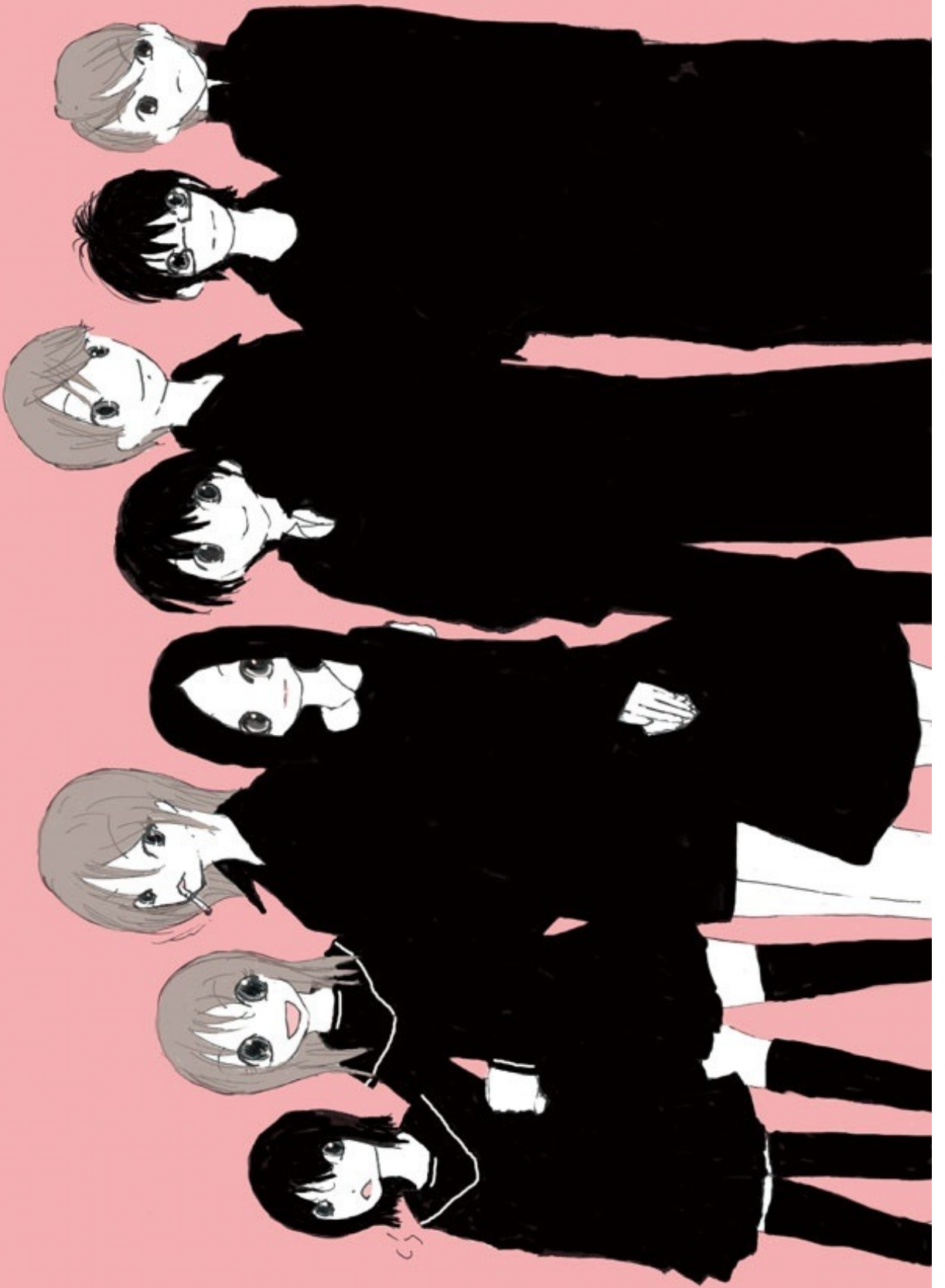
「御座者、御座者、性別、男」
片手に持ったサインターに挟んだ資料の内容を口の中だけで呟きながら、一人の女性が病院の廊下を歩いていた。時々、看護士や入院患者とすれ違ふが、白衣を着込んだ彼女を誰も気にはかけない。

白衣の上で長い黒い髪が揺れた。

「十七歳、都立第三高等学校二年、クラスメイトがこつくりさんをやってる形跡に入り込み」
一つの部屋の扉で立ち止まり、ふらりと部屋の扉を推してノックもせずにドアを開けて、中へ入り込んだ。後ろ手でドアを閉める、びしゃり。

「現在、意識不明」
資料に書かれていた言葉を思い出しながら、胸を叩くベッドの上の少年、御座者一をみる。彼は本当に、ただ眠っているさうだった。

「かわいそうに、と彼女は思ふ、こつくりさんに驚かされるなんてい





法律用語×恋愛短編小説

目次

この点に関する原審の判断は結論において正当である

原因において自由な行為

背信的悪意者

承継取得

原始取得

宣誓

明認方法

債務不履行

「ねえ、なんで私のことが好きなの？」

「珍しい発言」

恋人の持つ煙草の煙に目を細めながら、結構な勇気を出して言った言葉に、返ってきたのは意外そうな声だった。

「なんかあった？」

灰皿の上で指が揺れて、すこうしだけ心配そうに呟かれる。

「同情？」

その言葉は無視して続ける。

「そろそろ落ち着こうって思ったときに現れてちょうどよかった？」

「あのさ、」

「顔？」

「顔って、自分で言うなよ」

「贖罪？」

「茗、」

「都合がいいから？ 貴方がちゃらんぽらんするのにちょうどいいぐらいの収入があるから？」

それとも」

「茗！」

思いつく限り呟いていると、鋭く叫ばれて右手をつかまれた。珍しく怒った顔をしたあの人のすぐそばに、まだ長いままの煙草が落ちている。

「茗ちゃん、それ以上言うと本気で怒るよ」

低く、低く、吐き出される言葉。

「最初に茶化したのはシンの方でしょう？」

「いや、茶化すでしょ」

はあ、と盛大にため息をついてみせて、ごめんね、といいながら私の右手を離れた。

落ちている煙草を拾うためにしゃがみながら、

「面と向かって、いい年して、素面だし、なんでそんな甘いこと言わなきゃいけないのさ」

ぶつぶつと呟く。もったいないなあ、などといいながら灰皿に煙草を押し付けた。

「いい年だから、素面だから、面と向かって言って欲しいんじゃない。お酒はいったときも、寝物語も」

「え、何その親父な言葉のチョイス」

「……。ともかく、信用性にかけるじゃない」

慎吾は小さく笑った。

「なんだ、寂しかったなら言ってくれればよかったのに」

「誰が寂しいなんていった？」

「言ってるよ」

微笑む。いつものように。

「心配になっちゃった？ ごめんね」

そういいながら私の頭を撫でる。

「この点に関する原審の判断は結論において正当だね」

そう言って慎吾は小さく笑った。

「自分で好きだって、言えちゃうところが茗ちゃんのいいところだと思うけど、理由付けが間違っているようじゃしょうがないね」

「じゃあ、どうなるのよ？」

上目遣いで睨んでやる。

「可愛くて優しくで強くて、でも涙脆いし怒ると怖いけど、すぐ立ち直るし頑張ってたの本当に尊敬するし、ともかく」

彼にしては珍しく、優しく笑うと続けた。

「全部プラスな言葉で好きだよ」

目次

砂糖は二本

ケーキセット

ありがとうのかわりに

午後のスコール

恋は盲目

You mean "the world" for me!

+ α